

## 論文要旨

### 新名一仁「室町期島津氏領国の政治構造」

本論文は、室町期島津氏による領国形成やその崩壊過程を明らかにし、ひいては、室町期九州における守護の存在意義、「室町幕府一守護体制」との関係性を明らかにするための基礎的作業として、①室町期島津氏領国の政治史を再構築すると共に同領国内の政治的画期を明らかにし、②室町期島津氏領国内の「御一家」・「国衆」とよばれる自立した勢力と守護権力との関係、そして守護家直臣層を含めた島津氏領国の政治構造を明らかにしていくことを目的とする。

第1部「島津奥州家による領国形成とその特質」では、南北朝中期から始まる室町期島津氏の領国形成が、いかなる政治的背景のもと、いかなる論理でおこなわれたのかを検討した。鎌倉末期の時点で薩摩国守護職のみを保持していた同氏が、鎌倉幕府倒壊後に大隅国守護職を獲得して以降、どのような経緯で大隅・日向両国に進出し、いかなる論理のもとに領国形成をおこなっていたのかを分析し、康暦・永徳期、九州探題今川了俊との抗争を乗り切り、島津奥州家が「大隅国・日向国南部支配」を確立する過程を明らかにした。さらには、応永年間の島津奥州家当主元久・久豊二代にわたる領国拡大過程を明らかにしつつ、これを支えた諸勢力の分析と幕府による守護職安堵の背景を明らかにした。

第2部「一五世紀中期の領国内争乱とその影響」では、15世紀中期に勃発した薩摩国を中心とする「国一揆」とよばれる反島津方国人の蜂起と、その鎮圧過程で生じた守護島津忠国・持久兄弟の内訌、そしてこの内訌に影響を与えた大覚寺義昭事件、また内訌の最中に日向国南部で「第三極」形成を目指した国人一揆について検討し、各事案の原因と結果、島津氏の領国支配に与えた影響について明らかにした。

第3部「室町期島津氏「家中」の変遷と島津氏領国の解体過程」では、守護島津氏権力を時には支え、あるいは守護家当主の改替を図った「御一家」（島津氏庶子家）の特質を明らかにするとともに、この「御一家」と「御内」（守護被官）の集合体を室町期「家中」と捉え、その形成から15世紀後半の再編に至る過程を明らかにした。その上で、文明年間（1469～87）以降頻発する紛争・争乱と、その過程で結成される島津氏「一家中」一揆の背景と目的を明らかにし、守護家「家中」を中心とする室町期島津氏権力の解体過程を、新たな地域秩序の形成をふまえて検討した。

結論として、室町期の島津氏領国は、政治的に4期に時期区分される。Ⅰ期は、観応擾乱期（1350年代）～九州探題今川了俊の解任（1395年）で、「室町期島津氏領国形成期」。Ⅱ期は、九州探題今川了俊解任～島津久豊期（1420年代）で、「島津氏領国の確立・拡大期」であり、島津奥州家が本宗家としての地位を固めると同時に「室町期「家中」の確立期」。Ⅲ期は、薩摩国「国一揆」勃発（1432年）～島津立久死没・忠昌の家督継承（1474年）で、長期にわたる争乱による「島津氏領国の政治構造転換期」であり、「室町期「家中」の拡大・再編期」。Ⅳ期は、文明の争乱勃発（1476年）～島津相州家忠良の政権奪取（1526・1527年）で、「室町期島津氏領国の解体期」であると同時に、南九州における戦国始期と位置づけられる。

室町期島津氏権力最大の特質は、「島津荘を含む薩隅日三か国は島津氏の根本領国である」という独自の領有観に基づく領国形成にある。観応擾乱期に始まる同氏の領国形成は、

その当初から室町幕府を相対化しつつ独自の主従制を構築しながら進められ、「擬制的島津荘支配権」とでもいうべきロジックのもと、薩隅日三か国の封建領主として振る舞った。そうした特質のもと、本来直勤御家人であった有力御一家は、同氏の主従制下に入ることによって領主権を確立し、守護家被官（御内）と一揆的結合を結ぶことで同質化していき、室町期「家中」を形成していった。

15世紀中期まで、島津氏は室町幕府に対し薩隅日三か国守護職の補任・安堵を求めており、紛争時には、積極的に幕府・足利將軍家と接近することもあった。しかし、これは反島津氏勢力が、硫黄支配権や日明・日琉交易ルート上の要港支配を楯に幕府と接近することを阻止するための行動であり、島津氏の政治的本質は当初から幕府の相対化にあったとみるべきである。室町期島津氏にとって薩隅日三か国「守護職」とは、將軍家による改替可能な「吏務」ではなく、鎌倉期以来の「家職」という認識であり、領国形成の初発の段階から「室町幕府—守護体制」下の一般的な「守護」とは異なっていた。そして、これを支えてきた室町期「家中」にとっての守護島津氏とは、九州探題や反島津氏勢力と対抗するためのいわば「旗頭」であり、主従制の頂点に立つ存在でもあった。その意味で、島津氏領国における「守護」とは、下からの支持・要請によって保証される存在であったともいえる。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	新名 一仁
論文審査担当者	<p>(主査) 教授 柳原 敏昭  教授 佐藤 弘夫  教授 安達 宏昭</p>
論文名	室町期島津氏領国の政治構造
<p>本論文は、南北朝・室町期南九州の政治過程分析を基軸として、守護＝島津本宗家（奥州家）と室町幕府との関係、島津領国の政治的・地域的構造を明らかにしたものである。全体を3部10章（補論を含む）に分ち、その前後に序章と終章とを置いている。</p> <p>序章では、研究史を整理した上で、論文の課題を明示する。</p> <p>第1部「島津奥州家による領国形成とその特質」は、南北朝～室町初期（14世紀後半～15世紀前期）の島津氏による薩摩・大隅・日向三国に対する支配の拡大の態様とその論理の考察にあてられる。第1章では、島津本宗家が独自の領有観に基づき、幕府からの権限付与とは無関係に三国への支配を展開したことを明らかにする。第2章では、無年号文書の年代比定を通じて南北朝期政治過程の復原を行う。第3章では、本宗家となった奥州家の支配拡大と、家督や守護権をめぐる抗争について考察する。</p> <p>第2部「一五世紀中期の領国内争乱とその影響」は、第1部に続く時期を「国一揆」を中心に考察する。第1章では、永享年間の薩摩国「国一揆」を分析し、それを南北朝期以来の肥後・薩摩国境勢力による反島津・反守護闘争の延長線上に位置づける。第2章では、当該「国一揆」の鎮圧過程で勃発した、嘉吉・文安年間の島津氏本宗家の内訌を分析し、補論で、同家関わった大覚寺義昭（将軍足利義教異母弟）殺害事件について新見解を示す。第3章では、嘉吉・文安の内訌が長期化するなかで日向国南部に成立した、内訌に中立的立場をとる国人一揆を分析する。</p> <p>第3部「室町期島津氏「家中」の変遷と島津氏領国の解体過程」は、「家中」の変遷に視点を据えて島津氏の権力構造を考察し、戦国時代への展望を示す。第1章では、島津氏有力庶子家の、島津本宗家からの自立を志向しながらそれに依存するという、相反する性格を指摘する。第2章では、本宗家「家中」の変遷をたどり、全国的動向とは異なり15世紀後半に守護権力の強化がはかられたことを明らかにする。第3章では、それ以降、島津氏有力庶子家による一揆の出現により本宗家が弱体化する一方で、新たな地域秩序（地域ブロック）が構築されていくことを指摘する。</p> <p>終章では、論文全体の総括を行う。</p> <p>本論文は、地域構造に着目することで複雑きわまりない政治過程を明快に整理し、「国一揆」「家中」の分析を通じて政治構造の特質も明らかにしている。また、島津本宗家独自の領有観を抽出し、その展開を跡づけることにより、室町時代の守護の性格ひいては室町幕府の支配体制に関する議論にも一石を投じている。対外関係も含めた非常に広い視野の下、堅牢な実証に支えられた説得力のある議論が展開されており、斯学の発展に寄与するところ大なるものがある。よって本論文提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格があると認められる。</p>	